

中国帰国生の中国語観に関する一考察：学校における言語の位置付けに関連して

福嶋, 智
神奈川大学外国語学部：専任講師

<https://doi.org/10.15017/7374724>

出版情報：国際教育文化研究. 5, pp.17-27, 2005-06-30. Comparative and International Education, Faculty of Human-Environment Studies, Kyushu University

バージョン：

権利関係：



中国帰国生の中国語観に関する一考察 —学校における言語の位置付けに関連して—

福嶋智

1. はじめに

筆者はこれまで、中国帰国児童生徒（以下、中国帰国生と記す⁽¹⁾）のアイデンティティ形成過程の実態について、福岡市におけるフィールド調査を元に明らかにしてきた⁽²⁾。それと同時に、ホールのアイデンティティの概念をもとに、外国人児童生徒教育研究において、アイデンティティを他者との相互作用により連続的に形成し続けている動的なものとして捉えることの可能性について検討しこの一連の過程を「自己過程サイクル」と名付け、その妥当性を示した⁽³⁾。

これら一連の研究からは、いわゆる「日本人」とは異なる文化を保持する中国帰国生が、自己の「異文化性」（「中国性」）を、自己呈示する対象となる他者との関係性に応じて選択していることが明らかとなった。すなわち、他者との関係性によって、呈示する「自己」を操作しているのである。

外国人児童生徒教育研究における中国帰国児童生徒教育研究は、中国帰国生をニューカマーとして捉えてきたということができであろう⁽⁴⁾。このことは、その中心的課題が、日本語習得や学校への「適応」⁽⁵⁾であり、日本社会で生活していくための「スキル」習得であったことから明らかである。

一方、日中国交正常化以降の中国残留邦人の帰国事業の本格化から30年以上が経過し、日本への定住化が進んでいく中で、現在学齢期にある3世および4世の世代は、日本において出生もしくは低年齢時に渡日している場合が多い。今後日本で出生する中国帰国者の子どもが増加することが予見される状況において、その課題も変化していくことは明らかであろう。すなわち、日本で出生する中国帰国生は、日本語（学習言語、生活言語の双方）を身に付けており、日本の学校のみで成長するため、日本語習得や「学力」などの課題についてはある程度クリアすることが予見される。

しかしながら、かれらのアイデンティティ形成過程における課題は、依然残されたままであるということができよう。福嶋（2003b）で指摘したように、現在の学校においては、かれらが自らの中国性を、自分で選択しながら呈示するという「自由」が十分に保証され

ているとは言い難いためである。

そこで、本稿においては、かれらが学校において自己の中国性を呈示するにあたっての「障害」と認識している要因について、学校における言語の位置付けを中心に検討する。言語については、筆者のこれまでの研究においても、中国性を示すものとして、学校行事における中国語での作文朗読、中国語での進行など、様々な場面において表出「させられて」と認識している姿が明らかになっており、中国帰国生たちが自己の中国性の表出を強制されていると感じる典型的なものとなっている。

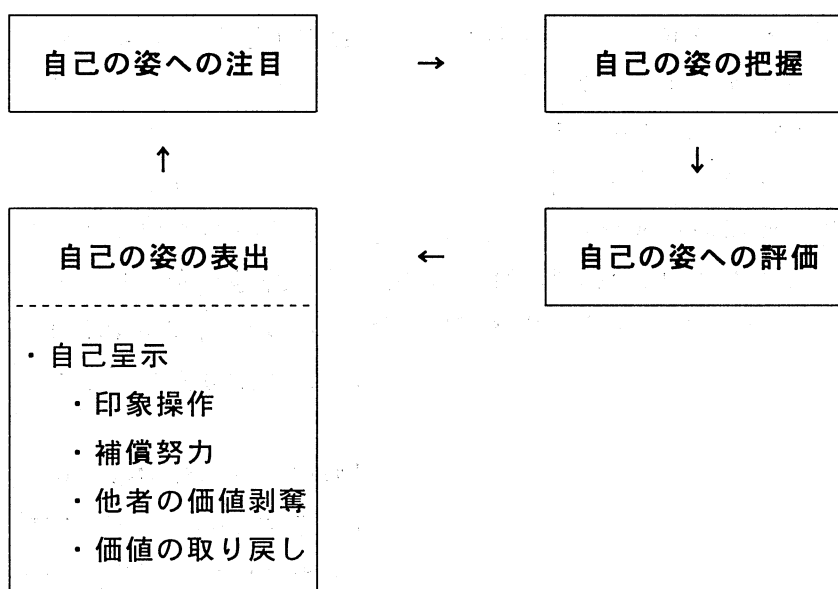
本研究においては、今後の学校教育における言語の位置付けとアイデンティティ形成過程との関係の方向性を探ることを視野に入れ、各学校段階における言語の位置付けを中国帰国生の認識を通じて明らかにすることにより、かれらの言語使用戦略の一端を示すことを目的とする。

2. 自己過程サイクルと言語

中国帰国生は、学校において、「名前」や「言語」などを通じて自己の中国性を表出している。福寫（2003b）では、国際理解教育実践におけるかれらのアイデンティティ形成過程に着目し、表出の場面および内容についてかれらの「選択」する余地の有無について検討した。

一方、かれらのアイデンティティ形成過程について、その過程が一つの方向に流れ完結する、というものではなく、その過程が循環していると見ることによって、かれらのアイデンティティ形成過程のダイナミズムを明らかにすることができるのではないかと考える（図1）（福寫：2003c）。

図1 自己過程サイクル



学校におけるかれらのアイデンティティ形成過程においては、「本当の自分」(real me) と思う自己像と、押しつけられた自己像のせめぎ合いが起こっていると見ることができるが、それこそがアイデンティティ形成過程であるという見方もできる。言い換えれば、石川（1992、1996）がいうところの「存在証明」が成功しているか否かではなく、その試み自体がアイデンティティ形成の過程なのである。

その際、かれらが自己の中国性としてとらえているのが名前および言語である。このうち、名前については、日本国籍取得者が増加する／している現状からは、今後、焦点化されなくなることが予見される一方、言語については、むしろ、その中国性を示すものとして焦点化されることが予見される。

そこで本稿においては、学校における中国帰国生のアイデンティティ形成過程に大きな影響を与えるものとして言語に着目し、学校における中国語に対する評価、すなわち、周囲の反応をもとに「自己の姿の把握」を行ったうえでの「自己の姿への評価」、そして、「自己の姿の表出」を行ってきたのか、という自己過程サイクルの視点から検討する。

3. 調査の対象と概要

本調査の対象（中国帰国生 A）は、現在、私立 E 大学外国語学部中国語学科の 2 年生であり、1 回目の聞き取り調査時は 1 年生であった。E 大学外国語学部中国語学科では、学生の中国語能力によって柔軟な中国語のクラス編成を行っており、現在、中国帰国生 A は 3 年生のクラスで中国語の授業を受講している。

なお、生育歴は以下の通りである。

【中国帰国生 A の生育歴】

1984 年	中華人民共和国哈尔滨（ハルピン）で生まれる
1993 年	渡日（東北地方の小規模都市）・日本国籍取得 公立小学校第 3 学年へ編入学
1994 年	同市内公立小学校へ転校
1997 年	同市内公立中学校入学

2000 年	私立 C 大学付属 D 高等学校入学
2004 年	私立 E 大学外国語学部中国語学科入学（現在 2 年生）

また、本調査は、2005 年 1 月、2005 年 5 月の 2 回、中国帰国生 A が在学する大学の筆者の個人研究室において実施した^(*)。

4. 学校における言語の位置付けをめぐる中国帰国生の認識

本節においては、中国帰国生が、学校における中国語の位置付けをどのように認識している／いたのかを中国帰国生 A の発言の中から探っていくこととする。

A は小学校 4 年生の 2 学期に同じ市内の小学校へと転校するが、その際の状況について、以下のように話している。

- | | | | |
|---------|---|--|---------------------------------|
| 筆 | 者 | ： | 今回は、中国語について話を聞くんだけど、これまでどうだった？。 |
| 中国帰国生 A | ： | じゃ、日本に来たときからでいいんですよね。 | |
| 筆 | 者 | ： | うん。小学校の時に日本に来たんだよね。 |
| 中国帰国生 A | ： | はい。日本に来て、学年落とされて、3 年生に入ったんですよ。で、転校する前の学校では自分の上（の学年：筆者註）にいとこがいたからみんな知ってました。でも、4 年生の 2 学期に転校したところでは、ばれてなかったですね。でも、いずれはばれると思ったから、クラスでは話しました。最初は好奇心で近付いてくるんですよ。でもやっぱり、いじめられましたね。うーんと、5 年生のときかな。で、なんでかっていうと、5 年生の時に、あ、6 年生の時もですけど、国際交流っていうのがあったんですよね。その時に中国語で話をさせられました。うーん、させられたっていうより、 <u>(1) 日本語以外にも話せるっていうのを表現したかったんですね。でも、やっぱり</u>
<u>・・・。</u> | |
| 筆 | 者 | ： | いじめられた？ |
| 中国帰国生 A | ： | はい、思いっきり（笑）。 | |

下線部 (1) の「やっぱり」という言葉からは、中国語を話した場合の周囲の反応とし

て「いじめられる」ことを予測していることが明らかである。すなわち、それまでの「自己の姿への評価」を通じて、「中国語を話す自分」の姿を表出した場合の周囲の評価を予測し、再度、「自己の姿の把握」を行っていると見ることができる。このことは、学校において自己の中国性を呈示したときの周囲の反応の境界線を探っていた、と言い換えることができる。そして、A がこの時点までに持っていた予測とある程度一致する形で周囲の反応が返ってきたのである。

その後、中学校に入学するが、小学校時代のいじめは継続していく。

筆者 者 : 中学校に入ってから？。

中国帰国生 A : 中学校に入ってから*も*いじめられましたね。みんな（中国から来たことを：筆者註）知ってましたし。なんか、いいこと全然なかったです。英語の時間とかに「China」とか「Chinese」とか出てくると、みんな異常に反応するんですよ（笑）。で、(2) 中学校に入っからは、中国語話そうとか、そんなチャレンジャーなことはできなかったですね。なんか、英語とかだったらいいんでしょうけど、中国語ですからね。やっぱ、中国語やばいですって。

筆者 者 : やばいって？。

中国帰国生 A : (3) 英語とかだとかっこいいじゃないですか。でも、なんてったって中国語ですからね（笑）。

下線部 (2) では、小学校時代に中国語を話した際の周囲の反応をもとに、中国語を話すことを「チャレンジャー」という言葉で表現している。そして、学校における中国語の位置付けを英語との対比において「やばい」という表現をしている。また、下線部 (3) では、英語については「かっこいい」という表現をしている。このことから、学校における中国語の位置付けを、日本語、英語と比較し、中国語が最も低く見られていると認識していることが明らかである。これらの「評価」は、中国帰国生 A のその後の自己呈示に大きな影響を与えている。

このことは、高校時代について述べた以下の発言からも明らかである。

高校は、私立の中位校に入学し、その当時のことを以下のように話している。

筆者 者 : 高校では？。高校は D 高校だよ。中位校？、（地域で）真ん中くらい？。

中国帰国生 A : はい。ちょうど真ん中くらいですね。で、高校では、基本的には（中国から来たことを：筆者註）みんな知らないんですけど、仲のいい

友達にだけ話しました。やっぱり、知られたらめんどくさいじゃないですか。中国語とかもちろん話しませんよ。でも、(4) 受験の時、なんで中国語学科なの、って聞く人はいましたけど。

筆者 者 : なんて答えた？

中国帰国生 A : (5) いや、なんとなく、っていつとききました。

筆者 者 : なんで中国語学科を選んだの？

中国帰国生 A : (6) せっかく中国語できるから、やっぱり利用しないと損じゃないですか。

下線部 (4) ～ (6) では、中国語を話せることを戦略的に活用するという姿勢が見て取れる一方、自分が中国帰国生であることを周囲へ隠すという姿もあらわれている。

その後、現在在学している E 大学外国語学部中国語学科へ推薦入学し、現在 2 年生である。

現在の大学生活について、以下のように話している。

筆者 者 : で、中国語学科に入ってみてどう？。

中国帰国生 A : 大学入ってからは、みんなに（自分が中国帰国生であることを：筆者註）話しますね。(7) 中国語話しても馬鹿にされないし。っていうより、たぶんうらやましがられてますね。今は、上の学年と一緒に授業受けてます。でも、みんな中国語できないんですよ。ま、当然でしょうけど。（中国語学科の：筆者註）先生より中国語うまいかも（笑）。だって、実家に帰ったら、親とは中国語で話すし、中国にも時々行ってますから。いや、ほんとに思ったより自分の（中国語の：筆者註）レベル高かったです。

下線部 (7) では、中国語学科へ入学し、自己の中国語能力が周囲に肯定的に受け止められていると感じていることが見て取れる。これまでの各学校段階において、中国帰国生 A が認識してきた周囲の中国語への評価は、ここまでの発言から非常に低く、いじめを引き起こす、というものであったといえることができる。しかしながら、大学入学後、とりわけ中国語学科における中国帰国生 A の中国語能力への評価は、非常に高いと認識している一方、「中国語話しても馬鹿にされないし」という発言からは、その認識の方向が中国語の能力だけではなく、中国語に対する周囲の評価という点にも及んでいることが明らかである。

一方、2005 年 5 月の調査時、研究室に入室しながら、以下のような発言をしている。

中国帰国生 A : ちょっと聞いてくださいよ。なんか大学変わりたいんですけど。っていうより、この大学いやなんですけど。

筆 者 : どうした？。入って来るなり、突然。

中国帰国生 A : どうもこうもないですよ。なんか最近気付いたんですけど、やっぱりいるんですよ、馬鹿にするのが。なんか、最近、そういうのが見えてきたって言うか、そういのもあって他の大学に行きたいんですよ。

筆 者 : でも、この前はうらやましがられてるって言ってなかった？

中国帰国生 A : うちの学科（中国語学科：筆者註）はそうなんですけど。でも、なんていうんでしょう。やっぱり、(8) 他学科とかだと馬鹿にしてるって言うようなことを言うのがいるんすよ。やっぱり、これが英語とかだと、いいんでしょうけどね。なんか、大学入ってからもう

: だっていうのがなんか納得できないんですよね。

筆 者 : じゃあ、英語ができるようになりたい？

中国帰国生 A : 英語よりも、日本語ですね。

筆 者 : でも、大学入るくらいの日本語力はあるでしょ。

中国帰国生 A : いや、そういう意味じゃなくて、生まれた時からずっと日本語、っていう人になりたいっていうか。うーん、純粋な日本人っていうんですかね。だって、これまで、ずーっと、学校でも日本語が一番じゃないですか。中国語って、一番下っていうか、数に入っていないですよ。だから、とにかく、そういうのがいいって思ってます。

ここでも、下線部 (8) のように中国語以外の言語との比較によって、中国語を位置付けていると同時に、中国語能力の位置付けが異なる集団に対しては、その位置付けに対し反発している。すなわち、大学入学前に想定していた大学における中国語の位置付けと、入学後の現実とのズレに対する違和感とあきらが入り交じっているということがいえよう。

ここまで見てきたように、中国帰国生 A の自己呈示としての「中国語を話す」という行為は、周囲の反応に応じて呈示の方法（呈示する／しないを含めて）を選んでいるということが言えるであろう。つまり、「中国語を話す」ことが肯定的に評価される場面においては、その能力を積極的に呈示し、そうでない場合にはできるだけ呈示しないという「戦略」をとっているということができる。

このことを、「戦略」と名付けることができるのかどうか、言い換えれば、このような

ことは「当たり前」のことである、という批判があるかもしれない。それと同時に、「戦略」と名付けることは研究者の恣意的な「権力」の行使であるという批判もあるであろう。しかしながら、かれらの自己呈示に関する行為は、「戦略」と名付け、その過程を明らかにすることによってはじめて浮かび上がってくるものであると考える。そして、それが成功している／していないに関わらず、その過程こそがアイデンティティ形成過程において重要な意味を持つのである。

5. まとめにかえて

筆者のこれまでの調査において、学校で中国語を話すことについて「恥ずかしい」、「いやだ」と感じている中国帰国生は数多く存在した。その要因となっているのが、本稿で明らかにしてきた学校における言語の位置付けである。すなわち、日本の学校においては日本語を頂点とした言語の序列付けが存在している、と中国帰国生は認識しているということができる。中国帰国生 A の場合、自身で「チャレンジャー」と呼ぶような自己呈示や「自己呈示しないこと」を通じて、小学校から高等学校にいたる各学校段階において、中国語を「余計なもの」としてとらえているのである。そして、自己の中国語能力を周囲が肯定的にとらえる場として、「中国語学科」を選択したということができるであろう。

ここからは、日本の学校における国際理解教育実践が向かうべき一つの方向性が見えてくるのではないだろうか。すなわち、自己を呈示する「手がかり」として言語をとらえ、その位置付けに着目した国際理解教育の構想である。従来の国際理解教育は「『文化（静的な文化）』を紹介する」ためのものとして言語を扱っていたということができるであろう。そのような、「異なる『文化』を理解してもらおう」ために紹介するという視点からは、言語（「文化」）の序列付けが行われてしまう。そこからは、ステレオタイプの理解しか生まれず、かれら一人一人の「個」は失われてしまう。そこで、中国語を中国帰国生のアイデンティティを構成する要素の一つである、とする視点が必要とされているのではないだろうか。すなわち、中国帰国生のアイデンティティの構成要素を中国語において代表させるのではなく、自己呈示する際の一つの手段としてとらえる視点である。このような視点に基づき、日常的な学校生活における中国帰国生の自己呈示を検討していく必要があるのではないだろうか。

中国帰国生は、学校におけるさまざまな場面において、日本語と中国語の権力関係の狭間に「置かれている」認識しているということができるであろう。しかしながら、受け身的な「置かれる」だけではなく、より積極的にはたらきかけ自らの意志で「置く」ことを模索している中国帰国生の姿も垣間見られる。今後は、このような中国帰国生の姿をさらに描き出すことを今後の課題としたい。

註

- (1) 現在、学齡期にある中国帰国者の子どもたちの呼称として「中国帰国児童生徒」が主に使われているが、この呼称では、学齡期にある子どもたちしか含めることができない。そこで、本稿においては、日本において主に学齡期を過ごした人々を含めた呼称として、「中国帰国生」を用いる。
- (2) 拙稿、2003a、2003b、2001a、2001b 参照。
- (3) 拙稿、2003c 参照
- (4) 拙稿、2002 参照。
- (5) ここでいう「適応」とは、容易に同化へと転化する危険性を孕んでおり、池上（2000）や拙稿（2002）でも指摘されている。
- (6) なお、本調査と並行して、2004 年 12 月より聞き取り調査を実施しており、本稿は、そのうちの学校における中国語に関連する部分によって構成されている。また、調査記録の方法は、筆者および中国帰国生 A の発言をそのままの形でワープロソフトで同時入力した。

参考文献

- 池上摩希子、2000、「中国帰国児童生徒と日本語教育—同化教育ではない日本語教育へ—」、『「中国帰国者」の生活世界』、蘭信三編、行路社、199頁－231頁
- 石川准、1992 年、『アイデンティティ・ゲーム 存在証明の社会学』、新評論
- 石川准、1996、「アイデンティティの政治学」、『差別と共生の社会学』、岩波書店、171 頁－185 頁
- 福寫智、2003a、「中国帰国者 3 世の学校および地域における自己呈示に関する一考察—『名前』、言語を中心に—」、『九州教育学会研究紀要』第 30 巻、九州教育学会、219 頁－226 頁
- 福寫智、2003b、「外国人児童生徒在籍校における国際理解教育実践に関する一考察—中国帰国生徒在籍校における聞き取り調査から—」、『中国帰国者定着センター紀要』、第 10 号、中国帰国者定着促進センター、80 頁－99 頁
- 福寫智、2003c、「『外国人児童生徒』教育におけるアイデンティティに関する一考察—中国帰国児童生徒教育と『在日朝鮮人』教育から—」、『飛梅論集』第 3 号、九州大学大学院人間環境学府発達・社会システム専攻教育学コース、161 頁－173 頁
- 福寫智、2002、「中国帰国児童生徒教育研究の現状と今後の課題」、『飛梅論集』第 2 号、九州大学大学院人間環境学府発達・社会システム専攻教育学コース、147 頁－161 頁
- 福寫智、2001a、「福岡市 A 中学校における日本語教室と担当教師の役割—中国帰国生徒と

担当教師の視点から－」、『九州教育学会研究紀要』第 28 巻、九州教育学会、159 頁－164 頁

福寫智、2001b、「中国帰国生徒の自己認識に関する一考察－生徒のライフヒストリーから－」、『国際教育文化研究』第 1 号、九州大学大学院人間環境学研究院国際教育文化研究会、51 頁－60 頁

A Study of Returnee-Chinese-Students' Concepts of Chinese Language

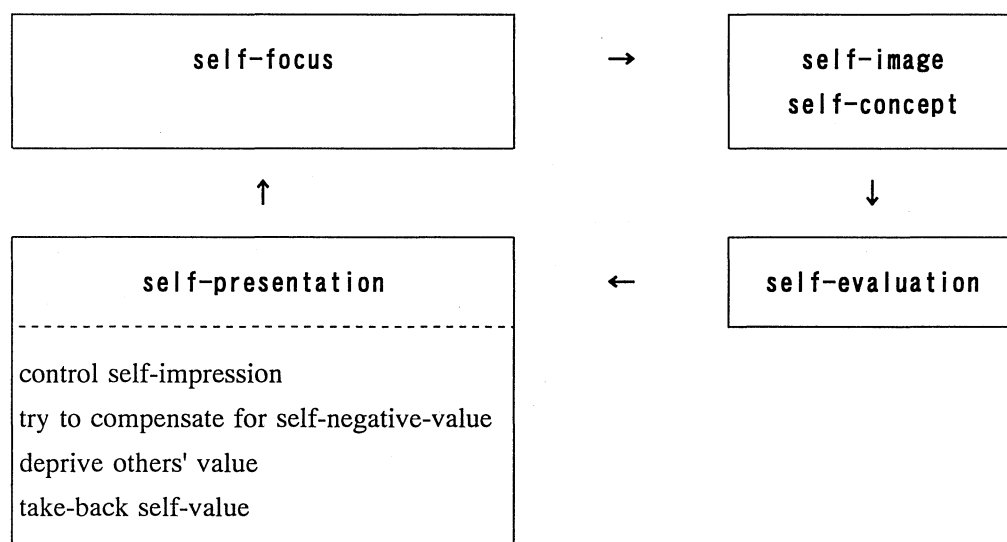
Tomo FUKUSHIMA

Purposes of this paper are below :

1. Returnee-Chinese-Students' strategy of using Chinese language
2. How to evaluate Chinese language in Japanese schools

In considering their identity, I suggest "Self-Process-Cycle" concept. This concept is that a sequence of forming one's identity is cycle of Self-Process. (Figure 1)

Figure 1 : Self-Process-Cycle



Returnee-Chinese-Student "A" is now student of "E" university, faculty of foreign language, department of Chinese language. And he said:

:In primary school, I hoped to express that I can speak Chinese language. So I spoke Chinese language, I was cruel by Japanese students.

:In junior high, I had no longer been able to hope to speak Chinese language. In primary school, I was "challenger!"

:In this university, so I enrolled department of Chinese language, I would be envied other students.

From his words, if Chinese language is evaluated high value in the school, Returnee-Chinese-Student is "comfortable" in the school. But schools in Japan is un comfortable for them. Evaluating Chinese language in Japanese schools is very negative.

Therefore, it is important that "Self-Process-Cycle" of Returnee-Chinese-Students' is occurring in schools "always."